

## 《第 37 号》「これからのゴミ処理施設」

松村真貴子（アナウンサー・エッセイスト）

息子が中学生の時のこと。明日は始業式、成績表に捺印しようと引き出しを空けたら、見当たらず、家族に内緒の搜索は深夜に及んだ。明日は、「燃えるゴミの日」まさかと思いながら、夕食後にまとめたゴミ袋を点検したら・・・あった！ ホッと胸をなでおろし、成績表にアイロンをかけた。東京都武蔵野市のゴミ処理施設「クリーンセンター」を見学した際、そんな失敗をふと思い出した。

「クリーンセンター」は、市役所の隣にあり、高い塀も無ければ、くさい臭いもしない。緑多き公演のような中にある。ゴミ処理施設を市街地に建設するには、市民との根気強い話し合いが必要だ。その結果、住民との共同意識が芽生え「運営協議会」ができ、ごみ減量に一役買っている。暮らしとゴミは、切っても切り離せないのだから。

そのクリーンセンターは、老朽化のため改築を迫られている。改築にあたり、関係者は主張する。「これからのごみ焼却施設は、地域の共同体の中で運営すべきである」自治体ごとに施設を持つのではなく、周辺の自治体が共同で建設した方が、予算を削減でき、立派な施設を造ることができるというのである。十分なスペースを確保し、焼却場のイメージを一新できる。耐久性の強い焼却炉も購入できる。

ところが、なかなか話し合いのテーブルについてくれないというのである。自治体という垣根を越えて協力し、知恵を出し合うことによって、将来を見据えたゴミ処理計画を造ることが可能になる。それを機に、図書館やホールなど公共施設の合理的な利用も促進されるのではなかろうか。灰にならずに済んだ成績表は、今でも引き出しの中にある。時々「あの時はごめんね」と、さすっている。

以上